

## ĐẶC ĐIỂM SỬ DỤNG *AIZUCHI* TRONG HỘI THOẠI CỦA NGƯỜI VIỆT NAM HỌC TIẾNG NHẬT TRÌNH ĐỘ TRUNG CẤP

Nguyễn Thị Lan Anh\*

*Aizuchi (back-channels, kênh phản hồi) là yếu tố quan trọng trong giao tiếp tiếng Nhật, thể hiện sự lắng nghe, đồng cảm của người nghe. Tác giả phân tích cách sử dụng aizuchi bằng lời của người Việt Nam học tiếng Nhật trình độ trung cấp. Dữ liệu gồm bảy đoạn hội thoại giữa người học và người Nhật bản ngữ được ghi âm, phiên âm và hiệu chỉnh. Aizuchi được trích xuất và phân tích theo ba khía cạnh: hình thức biểu hiện, tần suất và vị trí trong phát ngôn. Kết quả cho thấy người học sử dụng aizuchi để thể hiện sự quan tâm, nhưng vốn từ còn hạn chế và tần suất khác nhau giữa các cá nhân. Đặc biệt, aizuchi thường xuất hiện ở cuối phát ngôn, phản ánh sự tôn trọng mạch hội thoại và sự tiếp nhận chắc chắn lời nói của người tham thoại, khác với cách người Nhật thường dùng. Nghiên cứu góp phần làm rõ đặc điểm sử dụng aizuchi của người học và gợi ý ứng dụng trong giảng dạy giao tiếp tiếng Nhật.*

**Từ khóa:** aizuchi, hội thoại tiếng Nhật, người học tiếng Nhật, trình độ trung cấp.

*Aizuchi (back-channels) are essential elements of Japanese communication, expressing the listener's attentiveness and empathy. This study examines the verbal use of aizuchi by Vietnamese intermediate learners of Japanese. The data consist of seven recorded and transcribed conversations between the learners and native Japanese speakers. Instances of aizuchi were extracted and analyzed from three perspectives: form, frequency and position within utterances. The findings indicate that while learners employ aizuchi to express interest, their lexical range remains limited, and usage frequency varies across individuals. Notably, aizuchi tend to occur at the end of utterances, demonstrating respect for the conversational flow and attentive reception of the interlocutor's speech – a pattern different from that of native speakers. This study provides insights into aizuchi usage among Vietnamese learners and suggests implications for teaching Japanese conversational skills.*

**Keywords:** aizuchi, Japanese conversation, learners of Japanese, intermediate level.

### 中級レベルのベトナム人日本語学習者による「あいづち」の使用特徴

#### はじめに

日本語教育において、聞き手の役割が円滑なコミュニケーションにおける重要な要素として注目されている。

川名（1986）は聞き手が肯定的な反応（あいづちやうなずき）を示すことで話し手の発話が増加し、互いに好意的に評価されやすくなるとしている。さらに、日本語のあいづちは学習者が習

\* ThS., Khoa tiếng Nhật, Trường Đại học Hà Nội

Email: nguyennhanh202vj@hanu.edu.vn

得すべき重要な要素である（渡辺 1994）。

外国人日本語学習者が日本語のあいづちを習得するには、日本語母語話者との接触や自然な会話のインプットが不可欠である。しかし、日本国外、特にベトナムの学習者にはその機会が限られている。日本語母語話者は会話中に頻繁にあいづちを用いる一方、ベトナム語母語話者は使用頻度が低いという文化的特徴を持つ。そのため、学習者が会話であいづちを十分に使えない場合、円滑なコミュニケーションが難しくなる可能性がある。したがって、日本語教育において学習者のあいづち使用実態を把握し、結果を基に会話中心の授業や教授法を改善することは、学習者のコミュニケーション能力向上に有益である。

日本語における「言語的あいづち」に注目し、中級レベルのベトナム人日本語学習者が実際の会話でどのようにこれを使用しているかを明らかにすることを目的とする。視覚的手がかりを排除するために Zoom のカメラオフ形式でインタビュー会話をを行い、その音声进行分析対象とする。分析には記述的・比較的・定性的・統計的手法を用い、必要に応じてフォローアップインタビューを実施し、学習者のあいづち使用の意図を確認する。

## 1. あいづちに関する理論

あいづちは、聞き手が話し手に「聞いている」「理解した」などの意思を伝え、会話の進行を助ける短い応

答である（例：「はい」「そうですね」「なるほど」）。堀口（1997）は、日本語教育において細分化よりも「あいづち詞」という枠でまとめて扱う方が有効と指摘している。また、聞き手による繰り返しや言い換えも理解や共感を示すあいづちとして機能する。さらに、うなずきや笑い（杉戸 1989）、頭の横振り（メイナード 1993）、表情（松田 1988）など非言語的手段もあいづちに含まれる。言語的あいづちはうなずきと笑いの非言語的相槌と違い、「はい」「そうですね」など、イントネーションを伴う言語的反応である。

あいづちは、話し手の発話中の短いポーズやリズムの隙間に多く出現し、特に終助詞を伴うポーズで頻度が高い（メイナード 1993）。中島（2003）の調査では、接続助詞の後、名詞や名詞句の後、終助詞・間投助詞の後に多く出現し、全体の約 79% を占める。適切な位置でのあいづちは会話を円滑にし、不適切な位置では逆に流れを阻害する。

あいづちの頻度は会話のリズムや雰囲気を支える要素で、場面・媒体・人間関係により変化する。一般に 1 分間に 15～20 回程度とされ（水谷 1984）、話し手の発話速度に影響されやすい。性別・年齢・上下関係・親疎関係も頻度に関係し、女性や高齢者は多く、目上に対しては少なく、親しい関係よりも疎遠な関係で多くなる傾向がある。

## 2. 研究の方法

### 2.1. インタビュー会話の概要

表 1 インタビュー会話の概要

| 項目          | 詳細                                                                                                                                                                                                                             |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 参加者         | <ul style="list-style-type: none"><li>・ 学習者（JV1～JV7 という 7 名）日本語母語話者（JJ という 1 名）で構成される 7 組</li><li>・ 学習者：滞日経験なし（ベトナムのハノイ市内の大学で勉強）、日本語レベル：中級（N3 日本語能力認定書を取得）</li><li>・ 日本語母語話者：60 歳、日本語教育関係者</li><li>・ 学習者と日本語母語話者：初対面</li></ul> |
| インタビュー会話の話題 | 趣味                                                                                                                                                                                                                             |
| 実施形式        | Zoom カメラオフによる会話                                                                                                                                                                                                                |
| 実施日         | 2024 年 8 月 27 日～29 日                                                                                                                                                                                                           |

本研究では、ベトナム人日本語学習者と日本語母語話者による 1 対 1 のインタビュー会話を分析対象とした。学習者はハノイ市内の大学で日本語を 2 年間学び、N3 レベルを取得しているが、滞日経験はない。会話では学習者がインタビュアー、日本語母語話者がインタビュイーを務め、話題には自然なやり取りが生じやすい「趣味」を選定した。

データ収集には Zoom のカメラオフ形式を採用した。これは、カメラオンでは視線や表情などの非言語的手段に依存し、言語的あいづちがほとんど観察されなかったのに対し、カメラオフでは電話会話と同様に言語的あいづちが多く使用されることが確認されたためである。録音データは文字化し、学習者による言語的あいづちの使用実態を分析した。

ロールカード A

役割：インタビュアー

状況：レポートを書くために、あなたは日本人の趣味を調べています。紹介してもらった日本人に Zoom カメラオフで趣味についてインタビューをします。

すること：趣味は何か、趣味を持つきっかけ、趣味の魅力、これから趣味で何かするかということについて日本人に詳しくインタビューをして下さい。できるだけたくさん話してもらいましょう。

図 1 インタビュー会話のロールカード A

ロールカード B

役割：インタビュー

状況：レポートを書くために、日本人の趣味を調べているベトナム人学習者がいます。インタビューに協力するように頼まれました。Zoom カメラオフで趣味についてインタビューを受けます。

すること：趣味は何か、趣味を持つきっかけ、趣味の魅力、これから趣味で何かするかということをインタビューで聞かれたら、答えて下さい。

図2 インタビュー会話のロールカード B

## 2.2. データ収集

録音したインタビュー会話は7件ある。Turbo Scribe というトランスクリプションツールを活用し、録音した7件のインタビュー会話の音声を自動的にテキストに変換した。その後、文字起こししたテキストファイルをチェックし、表記が不自然な箇所を修正した。次に、文字起こしした会話のテキストからあいづちを抽出し、会話の流れを分析するとともに、市原（2014）を参考にあいづちの表現形式、頻度、談話内の位置の3つの観点から分析を行った。

## 2.3. 分析観点

表現形式に関しては堀口（1997）を参考にし、あいづち詞、繰り返し、言い換えの3つに区分した。それぞれの会話の中で、どの程度どのような形式が現れているかを調査した。使ったあいづちの表現形式は何のためか、学習者に確認してから解釈の内容を記述した。また、あいづちは「えーと」などのフィラーと、実質的な応答と間違えられることが多いため、これも十分

に見分け、取り出した。談話内でのあいづちの位置に関して、中島（2003）を参考に、あいづちが多く出現する位置を見た。あいづちの頻度に関して、総発話数に対するあいづちの比率、時間当たりのあいづちの回数を数えた。

## 2.4. 分析結果

インタビュー会話における各学習者のあいづちの表現形式、談話内の位置、及び頻度を分析した結果は下記の通りである。特にそれぞれのあいづちを使用する学習者の正しい意図を把握するために、フォローアップインタビューを実施し、その意図を確認した。

### 2.4.1. インタビュー会話1

JV1 と JJ のインタビュー会話1では、趣味や健康、観光地、生活について幅広く話題が13分30秒（810秒）展開された。JV1 は会話を通じて多様なあいづちを使用し、相手の発言への理解や関心を示した。「そうですか」「そうですね」など、「あいづち詞」（69.2%）が最も多く、「言い換え」（23.1%）がそれに続いた。一方、「繰り返し」は1回（7.7%）にとどま

った。JV1 の全発話 36 回中 13 回 (36.1%) があいづちで、1 分あたり約 1 回の使用頻度となっており、会話への積極的な関与があることが窺える。また、あいづちの使用位置は主に 3 つに分類される。第一に、文末やポーズ直後でのあいづちは発言の理解・確認を示し、話し手が安心して話を続けられるよう支えていた。第二に、終助詞の後に入るあいづちは共感や同意を示し、会話を円滑に保つ役割を果たしていた。第三に、付加疑問の後に打たれるあいづちは、相手の意図をくみ取り共感を表すことで、会話の一体感を生んでいた。

#### 2.4.2. インタビュー会話2

JV2 と JJ のインタビュー会話 2 は、互いの趣味を中心に約 7 分 20 秒 (440 秒) 続いた。JV2 のあいづち表現は「あいづち詞 (70%)」と「言い換え (30%)」が中心で、「繰り返し」は見られなかった。あいづち詞は「はい」「そうですか」など理解を示す表現、言い換えは「健康は大切ですからね」など共感を込めた再表現であった。使用頻度は 16 発話中 10 回 (約 62.5%)、1 分あたり約 1.37 回である。位置としては多くが文末のポーズ付近で用いられ、相手発言の終わりや要点を受け止める役割を果たしていたが、一部は付加疑問や終助詞付近でも確認された。

#### 2.4.3. インタビュー会話3

JV3 と JJ のインタビュー会話 3 では、10 分 58 秒 (658 秒) の間、JV3 は趣味について尋ねるとともに、JJ から趣味の体験やアドバイスも聞き出した。表

現形式は「あいづち詞」に限られた。具体的には、JV3 は「はい」「え」などの簡単な表現を、相手の発言に対する関心や理解を示す目的で使用した。JV3 が打ったあいづちは計 5 回で、総発話数に対する比率は約 31.3% となっており、やや低めの頻度と言える。また、あいづちの発話頻度は 0.45 回/分で、会話全体におけるあいづちの数は多くなかった。

#### 2.4.4. インタビュー会話4

JV4 と JJ のインタビュー会話 4 では、7 分 34 秒 (454 秒) の間、JJ の趣味だけでなく住む地域の風景などにも会話が進められた。JV4 が使用したあいづちの中で「そうですね」「いいですね」「え」など「あいづち詞」は 87.5% と大部分を、「言い換え」は 12.5% を占めている一方で、「繰り返し」は使用されなかった。主に相手の発言の文末やポーズ付近で JV4 があいづちを打ち、発言内容を一旦受け止めた上での応答を行うことで、相手への関心や共感を示す効果が高まることが確認できた。さらに、総発話数の 47.1% にあたる 8 回で、あいづちの頻度は 1.1 回/分であった。

#### 2.4.5. インタビュー会話5

JV5 と JJ のインタビュー会話 5 では、3 分 96 秒 (276 秒) の間、趣味だけでなく、JJ の他の好きなこと (音楽) に話題が広がった。JV5 が使用したあいづちの中で、80% が「あいづち詞」であり、残り 10% ずつを「繰り返し」と「言い換え」が占めた。特に「あいづ

ち詞」である「はい」を多用し、相手に対する理解や共感を示しているのが特徴的である。JV5 は「はい」といったあいづちを文末のポーズや終助詞付近、付加疑問の近くで適切に配置した。また、終助詞付近では相手の意見に柔らかに同意し、付加疑問付近では会話の流れを引き出す工夫が認められた。JV5 は総発話数 14 回のうち 10 回 (71.4%) であいづちを使用しており、1 分間あたり約 1.52 回の頻度であいづちを挟んだ。

#### 2.4.6. インタビュー会話6

JV6 と JJ のインタビュー会話 6 では、13 分 37 秒 (817 秒) の間、JV6 は JJ に聞いただけでなく、自身の感想や関連する知識も共有した。JV6 が使用したあいづちは「はい」や「そうですね」など、「あいづち詞」に限定される。「繰り返し」や「言い換え」といった表現形式は全く見られない。よって JV6 は相手の発話をそのまま受け止めるスタイルで、聞き手としての姿勢を維持したのではないだろうか。JV6 は文末のポーズや相手の発話が一区切りついたところであいづちを打つことが多かった。あいづち詞が相手の発話の文末で使われ、相手の発言を尊重しながらも会話の流れを遮らない形で進行した。あいづちの頻度は、総発話数 27 回のうち 8 回であり、比率は約 29.6% と低めであった。これは、ここから JV6 があいづちよりも自分の発話に重きを置く傾向があることが示唆される。1 分間あたりのあいづち頻度も約 0.59 回と少ない。

#### 2.4.7. インタビュー会話7

JV7 と JJ のインタビュー会話 7 では、JJ の趣味の詳細について会話が 8 分 36 秒 (516 秒) 進められた。あいづち詞と繰り返しがそれぞれ 47.1%、41.2%、言い換えが 11.7% を占めており、特に繰り返しによって JV7 が相手の発話内容を確認し、理解を示す役割を果たした。例えば「写真を撮ることですね」「カメラですね」といった繰り返しを使い、相手の発言に同意し理解を表明した。また、「自然と町ですね」「山と川ですね」といった言い換えも行い、相手の話をしっかり聞いて自分の言葉で再確認する姿勢が見られた。JV7 は、文末のポーズ付近や終助詞「ね」や「よ」が付いた発話の直後にあいづちを挿入する傾向があった。これは JV7 が会話の流れを妨げず、相手の発話を十分に受け止めながら反応することで、聞き手としての存在感を際立たせたということである。あいづち頻度は 1 分あたり約 1.98 回で、総発話数 28 回のうち約 60.7% をあいづちが占めている。

### 3. 考察

インタビュー会話の分析の結果は、中級レベルベトナム人日本語学習者によるあいづちの使用パターンを詳細に示している。それぞれの学習者は、相手の発言に対する理解や関心を示すために、異なる頻度や形式であいづちを使用していることがわかる。学習者によるあいづちの使用特徴は以下の通りとなる。

第一に、各学習者は「はい」「そうですね」「そうですか」など、相手に共感や理解を示す簡単なあいづち詞を中心に使用しており、会話を円滑に進める役割を果たした（表 2 参照）。

第二に、繰り返しや言い換えのあいづちは、JV1 や JV2、JV7 など一部の学習者にのみ観察されたが、全体としては少数派である（表 2 参照）。特に JV3 や JV6 などは、あいづち詞のみを使用していた。

表 2 学習者が使用したあいづちの表現形式

| あいづちの表現形式 | JV1   | JV2 | JV3  | JV4   | JV5 | JV6  | JV7   |
|-----------|-------|-----|------|-------|-----|------|-------|
| あいづち詞     | 69.2% | 70% | 100% | 87.5% | 80% | 100% | 47.1% |
| 繰り返し      | 7.7%  | 0%  | 0%   | 0%    | 10% | 0%   | 41.2% |
| 言い換え      | 23.1% | 30% | 0%   | 12.5% | 10% | 0%   | 11.7% |

第三に、全体を通して、各学習者は会話の自然なリズムや相手に対する関心・理解を示すためにあいづちを用いていると考えられる。あいづちの表現形式や位置が会話の流れを保ち、相手に対して柔らかな共感や配慮を示すことで、インタビュー会話の円滑な進行に貢献する。

第四に、JV1、JV2、JV4、JV5 などは 1 分あたりほぼ 1 回の頻度で、JV7 はほぼ 2 回の頻度であいづちを打っているのに対し、JV3 と JV6 ではやや低い頻度であった（表 3 参照）。この頻度の差は、会話の流れや話題への関心の高さが影響していると考えられる。

表 3 学習者が使用したあいづちの頻度

| 項目                     | JV1          | JV2          | JV3          | JV4         | JV5          | JV6          | JV7          |
|------------------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|--------------|
| あいづち比率<br>(総発話数に対する比率) | 36.1%        | 62.5%        | 31.3%        | 47.1%       | 71.4%        | 29.6%        | 60.7%        |
| 時間当たりの<br>あいづち回数       | 0.96 回/<br>分 | 1.37 回/<br>分 | 0.45 回/<br>分 | 1.1 回/<br>分 | 1.52 回/<br>分 | 0.59 回/<br>分 | 1.98 回/<br>分 |

第五に、文末のポーズ付近でのあいづちが多用されており、発言の終わりに理解や確認を示す役割を果たした。JV4 や JV5 などがこのパターンを多用しており、会話の流れを尊重し、相手の発言をしっかりと受け止めているこ

とがわかる（表 4 参照）。終助詞付近や付加疑問の近くでのあいづちも、相手の意見に対する共感を示すために使用され、スムーズな会話を支える工夫が見られた。

表 4 学習者が談話内で使用したあいづちの位置

| 項目       | JV1   | JV2 | JV3  | JV4 | JV5 | JV6  | JV7   |
|----------|-------|-----|------|-----|-----|------|-------|
| 文末のポーズ付近 | ○     | ○   | ○    | ○   | ○   | ○    | ○     |
|          | 53.8% | 80% | 100% | 75% | 80% | 100% | 70.6% |
| 終助詞付近    | ○     | ○   | ×    | ○   | ○   | ×    | ○     |
|          | 38.5% | 10% | 0%   | 25% | 10% | 0%   | 29.4% |
| 付加疑問の付近  | ○     | ○   | ×    | ×   | ○   | ×    | ×     |
|          | 7.7%  | 10% | 0%   | 0%  | 10% | 0%   | 0%    |

以上の結果から、中級レベルベトナム人学習者のあいづち使用には一定のパターンが見られ、会話のリズムを保ちながら相手の発言を受け止める姿勢が確認できた。一方で、表現のバリエーションが乏しいという課題があり、繰り返しや言い換えを取り入れることで表現力の向上が期待される。

指導面では、①あいづちの頻度調整、②表現のバリエーション拡充、③発話位置に応じたタイミング習得、の3点が重要である。具体的には、少ない学習者には話の終わりや要点後に「あ、そうなんですね」「なるほど」などを挿入する練習を行い、同一表現を多用する学習者には「そうなんですね」「それは面白いですね」など多様な表現を導入する。また、発話途中で過剰にあいづちを打つ学習者には、区切りやポーズに合わせて自然に挿入できるよう訓練する必要がある。

### おわりに

本稿では、中級レベルベトナム人日本語学習者と日本語母語話者のイ

ンタビュー会話の分析を行い、学習者の言語的あいづちの表現形式、頻度、使用位置といった使用特徴を考察した。その結果、各学習者が相手の発言に対する理解や関心を示すためにあいづちを用いていることが分かるが、あいづち表現のバリエーションが少ないという課題も浮かび上がった。また、学習者の間に、あいづちの使用した頻度に差があるが、日本語母語話者と比べるものではない。談話内で文末のポーズ付近でのあいづちが多用される。会話の流れを尊重し、相手の発言をしっかりと受け止めていることがわかる。これは、学習者の文化に関係があるからだと思われる。特に、他者の発言を途中で遮らず、礼儀正しく会話を行うことが望ましいとされ、子どもたちはそのような礼儀作法を身につけるよう促されている。ベトナムの文化では、相手が言い終わったら、自分が話始めることが多いことになっている。相手が話している途中、何か言ったら失礼になる。これは、幼少期より家庭でのしつけとして教えられるとともに、社会



的スキルやコミュニケーションスキルに関する書籍やハンドブック、さらにはベトナムのテレビ番組等においても繰り返し強調されている。

本研究は限られた学習者と母語話者の会話データに基づく定性的分析であり、結果の一般化には慎重さが必要である。今後は、より多くの学習者を対象とした量的調査を併用し、データの説得力を高めたい。また、中上級学習者を対象とした調査を行い、中級との比較からあいづち使用の差異を明らかにすることを今後の課題とする。

### 参考文献

1. 市原, 千愛. (2014). 会話におけるあいづち—「好感を持たれるあいづち」の特徴— [Aizuchi trong hội thoại: Đặc điểm của “aizuchi tạo thiện cảm”]. *東京女子大学言語文化研究[Nghiên cứu Ngôn ngữ và Văn hóa Đại học Nữ sinh Tokyo]*, 23, 1-15.
2. 川名, 好裕. (1986). 対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果 [Hiệu quả sử dụng aizuchi của người nghe khi giao tiếp trong việc tạo ấn tượng với người đối thoại]. *実験社会心理学研究 [Nghiên cứu Tâm lý xã hội thực nghiệm]*, 26(1), 67-76.
3. 杉戸, 清樹. (1989). ことばのあいづちと身振りのあいづち-談話行動における非言語的表現[Aizuchi bằng lời và aizuchi bằng cử chỉ: Biểu hiện phi ngôn ngữ trong hành động ngôn từ]. *日本語教育 [Giáo dục tiếng Nhật]*, 67, 48-59.

4. 中島, 悦子. (2003). 発話上におけるあいづちの出現位置とその分布—自然談話録音資料にもとづいて— [Vị trí xuất hiện và sự phân bố aizuchi trong phát ngôn: Dựa trên tư liệu ghi âm hội thoại tự nhiên]. *21 世紀アジア学会紀要 [Kỷ yếu Hiệp hội Nghiên cứu Châu Á thế kỷ 21]*, 1, 65-78.

5. 堀口, 純子. (1997). *日本語教育と会話分析 [Giáo dục tiếng Nhật và phân tích hội thoại]*. くろしお出版 [NXB Kuroshio].

6. 松田, 陽子. (1988). 対話の日本語教育学—あいづちに関連して— [Giáo dục học tiếng Nhật về đối thoại: Liên quan đến aizuchi]. *日本語学 [Ngôn ngữ học tiếng Nhật]*, 7(13), 59-66.

7. 水谷, 信子. (1984). 日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析— [Giáo dục tiếng Nhật và thực trạng về từ thông tục: Phân tích aizuchi]. 金田一春彦博士古稀記念論文集 言語学編 [Trong Kỷ yếu kỷ niệm 70 tuổi Giáo sư Haruhiko Kindaichi: Ngôn ngữ học], 2, 261-279. 三省堂 [NXB Sanseido].

8. メイナード, K. 泉子. (1993). *会話分析 [Phân tích hội thoại]*. くろしお出版 [NXB Kuroshio].

9. 渡辺, 恵美子. (1994). 日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において使用された言語的あいづち [Phân tích aizuchi của người học tiếng Nhật: Trường hợp sử dụng aizuchi bằng lời trong hội thoại trên điện thoại]. *日本語教育学会 [Tập chí Giáo dục tiếng Nhật]*, 82, 110-122.

(Ngày nhận bài: 17/4/2025; ngày duyệt đăng: 30/9/2025)